

令和 5 年 4 月 8 日現在

機関番号：32682

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2020～2022

課題番号：20K00018

研究課題名（和文）「永遠の哲学」の研究 - フィチーノからライプニッツまで -

研究課題名（英文）A Study of the Perennial Philosophy: From Ficino to Leibniz

研究代表者

枝村 祥平（Edamura, Shohei）

明治大学・経営学部・専任教授

研究者番号：50725588

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,500,000円

研究成果の概要（和文）：本研究において私は、フィチーノからライプニッツに至るまでの重要人物たちによる、時代や地域を越えた普遍的な哲学を古代文献のうちに模索を解明しようとした。その結果、キリスト教徒ではなかった古代人にそうした普遍的な哲学を見出したことが結果として、古代中国哲学においてもそれを認めることに繋がった過程を明らかにすることができた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

20世紀以降、例えばオルダス・ハクスレー『永遠の哲学（The Perennial Philosophy）』に代表されるように、西洋古代の文献や儒教の古典のみならず、仏教・道教の文献や、ヒンドゥー教・イスラム教の文献に、人類一般に普遍的に通用する哲学を模索する試みがみられた。本研究は、15-18世紀においてそうしたトレンドの準備がなされた過程を明らかにするものであるといえる。

研究成果の概要（英文）：In this research, I attempt to elucidate how important figures of the 15-18 centuries, such as Marcilio Ficino and G.W. Leibniz, explored a universal philosophy that holds everywhere and anytime within ancient texts. I clarified how the attitude to seek such a universal philosophy among the non-Christian ancients led the figures to include Chinese classics among the canons of the perennial philosophy.

研究分野：哲学・倫理学

キーワード：永遠の哲学 ルネサンス哲学 中国哲学 ライプニッツ 比較思想 宗教改革

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

## 1. 研究開始当初の背景

研究代表者の枝村は、『ライプニッツ著作集 第二期 第二巻』(工作舎 2016年)において「ウィーン講演」(1714)を翻訳することになった。この文献は、最晩年のG.W.ライプニッツ(1646-1716)が、古代ヘブライ人、エジプト人、カルデア人、インド人などが、近代においてもすべての人類が保持すべき普遍的な哲学・神学を不完全な仕方ではあるが認識していたこと、ただとりわけギリシア人たちは論理学などを通じて他の地域の人々にはない真理を模索する技法を確立した点で重要であることを論じたものである。そこでは、同年のニコラ・レモン宛書簡にある「永遠の哲学 (philosophia perennis)」という言葉こそ使われていないが、実質的にはそれと大きく関わる論議であったといえることができる。

「永遠の哲学」とは、地域・時代を異にする哲学者たちが共有している、普遍的な哲学(特に神学・人間存在論)を指す言葉であるが、様々な人物たちが「永遠の哲学」があるとの想定をし、先人たちの言葉のうちに普遍的な哲学を見出そうとした。そして哲学史家たちもこの概念に着目し、例えばチャールズ・シュミットは、マルシリオ・フィチーノ(1433-99)の「いにしへの神学 (prisca theologia)」概念がライプニッツの「永遠の哲学」概念形成に影響を及ぼしたことに触れている。しかし、フィチーノの影響を受けつつ、18世紀に到るまでの哲学者たちがそれぞれの体系において、「永遠の哲学」をどの程度まで自覚し受け継ごうとしたのかについては説明がなされていない。

こうした問題意識を受け枝村は2019年度に、以前から思い描いていた、フィチーノに遡って「永遠の哲学」の変遷・内実を探る試みを実行した。具体的には、フィチーノの『プラトン神学』を中心に、『パイドロス注解』『パルメニデス注解』『ディオニシオス注解』なども読み込み、フィチーノが普遍的な神学を継承したと解釈する人物たち(ゾロアスター、ヘルメス、オルペウス、アグラオパモス、ピュタゴラス、ピロラオス、プラトン)に、フィチーノの解釈に基づけばどのような共通点があるかを論じた(「フィチーノといにしへの神学者たち」)。さらに、『人間の尊厳について』『900の提題』『存在、そして一について』『ヘブタプルス』に基づいて、ピコ・デラ・ミランドラ(1463-94)が「いにしへの神学」に属する諸テーゼをどこまで認めたか、フィチーノのいう「いにしへの神学者たち」をどのように解釈したか、またピコが彼ら以外のどういった人物たちを普遍的な神学の継承者とみなすのか、を論じた(「ピコ・デラ・ミランドラはどのように「いにしへの神学」を受け継いだか」)。

そして、より大きなプロジェクトを何年かがかりで遂行しようと考え、2020年からの基盤研究の計画を日本学術振興会に提出することにした。具体的には、フィチーノからライプニッツに到るまでの人物たちは具体的にどのような影響関係をもったのか、彼らの影響関係、彼らの「いにしへの神学」「永遠の哲学」概念は彼ら自身の哲学体系にどう反映されているのか、を明らかにしようとする計画であるが、この研究は近代以後における「永遠の哲

学」の展開、そしてその展開の比較思想、現代哲学といった観点からみた意義をも探る導きの系になると考えられる。

## 2．研究の目的

本研究の目的は、哲学史で重要概念となってきた「永遠の哲学 (philosophia perennis, perennial philosophy)」を、その概念形成の先駆となった「いにしへの神学 (prisca theologia)」との関連に着目しつつ、フィチーノからライプニッツに到るまでのテキストを読み込み、歴史学文献により当時の時代精神も踏まえつつ精密に分析し解明することにある。「永遠の哲学」概念は、18世紀以降現代までインド哲学などをも取り込んで受け継がれている。本研究は歴史的意義と共に現代的意義をも持つ概念に基づいた哲学的探求の基礎を提供することを目指す。具体的には、フィチーノ、ピコに加え、永遠の哲学」を最初に説いたステウコ、さらにはド＝モルネー、ヘンリー・モア、カドワース、ライプニッツをも整理・解釈し、先行研究で未だに明らかになっていない「いにしへの神学」が「永遠の哲学」に与えた影響の詳細、及び古代ギリシア哲学、キリスト教・イスラム教哲学のみならず中国哲学を取り込むまでに広がりを見せた「永遠の哲学」の変容過程を提示したい。そして、現代でも西洋とインド・中国・日本の哲学が共有する普遍的な思想を模索する試みを支える理念であり続けている「永遠の哲学」に歴史的・哲学的な基礎を提供することを目指す。

## 3．研究の方法

以上に述べたような研究目的を達成するために本研究ではまず、ルネサンス・宗教改革期・近代初期にわたる重要な人物たちの著作を、原典で徹底的に読み込み、正確にかねらの思想を浮き彫りにしようと試みる。また、それぞれの人物たちに関する研究書や論文も参照し、先行研究の成果を活かしてゆく。さらに、15-18世紀のヨーロッパに関する歴史学の文献をも精読することで、当時の文化状況、それらの思想が生み出された社会的背景を正確に理解した上で解釈論を展開する。計画研究成果は順次雑誌論文が発表し、また学会でも個人発表やシンポジウムにて成果を公表し、活発な議論を研究に反映させてゆく。

## 4．研究成果

まず2020年度の研究においては宗教改革期における重要人物たちの思想を正確に把握することにつとめた。具体的には、『永遠の哲学について』を書いてこの用語を初めて歴史上で広めた人物であり、またカトリックの護教論者であるアグスティノ・ステウコ(1497-1548)と、ユグノーの教皇とまで言われた指導者であり、同じような手法でプロテスタントの教義を基礎づけようとしたフィリップ・ド＝モルネー(1549-1623)の比較が主たる研究テーマ

となった。ステウコはプロテスタントたちを徹底的に批判する一方で、洗礼を受けていない  
しクリスチャンとも自認していなかった古代の哲学者たちが、キリスト教の教義の重要部  
分を既に提示しているという見解を取ってきた。この点においてはステウコはフィチーノ  
やピコを引き継ぐ(実際ステウコはピコに最大限の敬意を示している)。このような仕方で  
包括性と排他性を併せ持ったステウコの思想は、皮肉な仕方でモルネーに受け継がれる。彼  
は古代の様々な文献を渉猟して普遍的な神学を見出すという同様の手法を使って、カトリ  
ック教会に属する人間もプロテスタントも同様に理性に基づいた神学を受持しうるのであ  
り、また普遍的教会のメンバーとなることができると力強く論じたのである。モルネーにお  
いても、キリスト教徒以外は救済に与ることはできないと強調されているので排他性は見  
いだされるが、カトリック教会の外部の人々を包摂する思想は明らかにそこにある。

なお日本学術振興会に2019年に提出した研究計画には明記していなかったが、次年度に  
しようと当初は考えていたケンブリッジプラトニスト(特にヘンリー・モア(1614-87))に  
ついての研究と、さらにライプニッツによる中国理解に影響を与えたマテオ・リッチ(1552-  
1610)の研究も少しだけ進めることができたのは幸いであった。

次に2021年度の研究についてであるが、予定ではケンブリッジプラトニストの研究が主  
たる課題であった。幸い前年度に時間がありヘンリー・モアについての研究を少し進めるこ  
とが出来たので、それを受けて本年度はレイフ・カドワース(1617-88)についての研究を、  
主に『宇宙の真の知的体系(The True Intellectual System of the Universe)』に基づいて行  
った。彼は英国国教会に属する人物であって、ステウコともモルネーとも異質の人物だが、  
幅広い人物が永遠の哲学を受け継いできたという理解においては彼ら、そしてピコと共通  
するということができる。一方、以前の人物にみられなかった特徴と、唯物論に対する激し  
い攻撃がある。これは近代特有の事情にもよると考えられる。ルネサンスや宗教改革期の人  
物は17世紀の科学革命をどう説明するかという課題を背負わなかったが、これに対してカ  
ドワースやモアはデカルト哲学の影響のもと、独自の粒子論に基づいた自然哲学を採用し  
ている。しかし、敬虔な有神論者であったカドワースやモアにとっては、この自然哲学はエ  
ピクロスのような無神論につながる唯物論は厳然と区別されなければならなかったのであ  
る。

なおこの年度は、やや研究計画を前倒ししてライプニッツと古代哲学との関わりに関す  
る論考を残すことができた。ライプニッツは古代の諸文献のうち、『カルデア神託』『ヘルメ  
ス文書』などはあまり重視してないが、これは文献学の発達により、これらがむしろ新プラ  
トン主義が流行した時代以降の比較的新しいテキストであるとされた影響だと考えられる。

最後に2022年度には、ケンブリッジプラトニストの研究、ライプニッツの研究、および  
「永遠の哲学」の伝統において盛んに参照された古代の文献についての研究を重点的に行  
った。ケンブリッジプラトニストに関しては、モアの研究を中心にしている。モアはカドワ

ースやライプニッツと同様に主知主義をとり、神の知性が永遠に普遍的正義を基礎づけていると考えて、ルネ・デカルト（1596-1650）やトマス・ホッブズ（1588-1679）に反対の立場をとった。しかし一方で、モアは詩的な感受性豊かな人物であり、若年期に書かれた哲学詩には、理性や知性を介さずそれらを一足的に飛び越えて神に接することを語っているかにみえる箇所もある（そして、R.W.エマーソン（1803-82）はモアのそのような側面をかぎ取ってか、『大霊（The Over-Soul）』の冒頭でモアの詩の一節を引用したのであった）。

ライプニッツに関しては、前年度に引き続き、彼が永遠の哲学の伝統に属する人物たちをどう論じてきたか、具体的には、ゾロアスター、ヘルメス、ピュタゴラス、プラトン、アリストテレス、プロティノス、プロクロス、フィチーノ、ピコ、ステウコ、ド・モルネーといった人物の扱いがどうなっているかを精査したとともに、彼の中国哲学論についての研究を深めた。彼は『詩経』『書経』を原典で読んだ形跡がないが、しかし論敵であるニコラ・ロンゴバルディ（1559-1654）の著作にある引用などを手掛かりにしながら、これらの書物を明確に、「永遠の哲学」の古典に含める意図をもっていることは、『中国自然神学論』（1716）から読み取れる。そして、『中国自然神学論』はニコラ・レモンがライプニッツに対して、古代中国人も神を認識していたというイエズス会の見解についてどう思うかと質問したことが著述のきっかけとなっているので、質問以前にライプニッツがレモンに語っていた「永遠の哲学」に、古代中国哲学を含めようという意図とは明らかである。また、1698年に始まったジョアシャン・ブーヴェ（1656-1730）とのやり取りを通じて、ライプニッツは『易経』に神による創造の教説が表現されていると考えたのであった。

なおこの年度においては、ルネサンス以降の人物たちが参照した古代の文献について研究ノートを書き溜めることもできた。具体的には、まだまだ至らない点もあるが、『カルデア神託』『ヘルメス文書』『オルペウス讃歌』『黄金の詩』、プロティノスなどの新プラトン主義者たち、初期教父たちについて概観することができた。

今後は、単著の著書の出版に向けた原稿を準備していきたい。著書の各章は、さしあたり次のようなものを考えている。「1 序論 古代のテキストの概観」「2 フィチーノにおける理性的神秘主義」「3 フィチーノとピコ 古代の系譜学をめぐって」「4 ステウコとモルネー 「永遠の哲学」は誰のものか？」「5 モアとカドワース ケンブリッジの賢人たち」「6 ライプニッツと永遠の哲学」「7 ライプニッツと中国哲学」。これらのいずれもが、真摯な加筆と彫琢を必要とする。とりわけ、4に関してはステウコとモルネーの著書のうち私が未だに読んでいないものを読みこなし理解した上で原稿を仕上げる必要がある（現在、それらの著書を読んでいるところである）。

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計10件（うち査読付論文 1件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 9件）

1. 著者名 枝村祥平	4. 巻 560
2. 論文標題 ラルフ・カドワースと永遠の哲学	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 『明治大学教養論集』	6. 最初と最後の頁 1-33
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 枝村祥平	4. 巻 68
2. 論文標題 Leibniz and the Perennial Philosophy	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 『人文科学論集』	6. 最初と最後の頁 79-98
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 枝村祥平	4. 巻 14
2. 論文標題 フィリップ・ド＝モルネー ユグノーによる「永遠の哲学」	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 『人間科学研究』	6. 最初と最後の頁 43-50
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 枝村祥平	4. 巻 49
2. 論文標題 ヘンリー・モアと永遠の哲学	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 『星稜論苑』	6. 最初と最後の頁 29-42
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 枝村祥平	4. 巻 5
2. 論文標題 マテオ・リッチ, 儒教・仏教, 永遠の哲学	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 『金沢星稜大学人文学研究』	6. 最初と最後の頁 19-31
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また, その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 枝村祥平	4. 巻 53
2. 論文標題 アグスティノ・ステウコ 「永遠の哲学」のはじまり	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 『金沢星稜大学論集』	6. 最初と最後の頁 1-10
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また, その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 枝村祥平	4. 巻 18
2. 論文標題 フィチーノにおける理性と神秘主義	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 『新プラトン主義研究』	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また, その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 枝村祥平	4. 巻 564
2. 論文標題 Leibniz and Chinese Philosophy	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 『明治大学教養論集』	6. 最初と最後の頁 251-265
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また, その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 枝村祥平	4. 巻 565
2. 論文標題 Henry More's Philosophical Poems: Between Intellectualism and Anti-Intellectualism	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 『明治大学教養論集』	6. 最初と最後の頁 19-33
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 枝村祥平	4. 巻 69
2. 論文標題 Ancient Sources of the Perennial Philosophy	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 『人文科学論集』	6. 最初と最後の頁 51-64
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

〔学会発表〕 計3件 (うち招待講演 1件 / うち国際学会 0件)

1. 発表者名 枝村祥平
2. 発表標題 フィチーノにおける理性と神秘主義
3. 学会等名 新プラトン主義協会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 枝村祥平
2. 発表標題 マテオ・リッチからライブニッツへ 儒教や仏教の理解はどのように受け継がれたか
3. 学会等名 日本ライブニッツ協会
4. 発表年 2020年



1. 発表者名 枝村祥平
2. 発表標題 「永遠の哲学」の伝統からみた『弁神論』
3. 学会等名 日本ライブニッツ協会（招待講演）
4. 発表年 2022年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関